［自由研究］

詩編注解（3）：詩編3編

田　中　　光

はじめに

前回の注解（『伝道と神学』13号［2023年］）では詩編2編までの内容を取り上げた。今回は詩編3編の注解（一回目）へと進むこととする。尚、本注解の凡例については、『伝道と神学』12号（2022年）を参照されたい。

注解

詩編3編

＜私訳＞

1　ダビデの賛歌。[a]彼が息子アブサロムから逃れたとき。

2　主よ、私を苦しめる者たち[b]の何と多いことでしょう。
　多くの者たちが私に向かって立ち上がっています。

3　多くの者たちが私の魂[c]に向かって言います。
　「彼に神の救いなどあるものか」[d]と。　セラ[e]

4　しかし、あなたは、主よ、私を取り囲む盾[f]。
　私の栄光、私の頭を上げさせてくださる方。

5　私は大声であなたに呼ばわった。[g]
　すると、あなたはその聖なる山から私に応えられた。[h]　セラ

6　私は横たわり、そして眠った。
　私は目覚めた。[i]実に主が私を支えていてくださるからだ。
7　私は民の群れ[j]を恐れることはない。
　彼らは私を取り囲んでいるが。
8　立ち上がってください、主よ。
　私を救ってください、私の神よ。
　実に、あなたは全ての私の敵たちの顎[k]を打ち砕き、
　愚かな者たちの歯を粉砕されました。
9　主にこそ救いはある。
　あなたの民の上に祝福があるように。　セラ

＜訳注・本文批評的注＞

1a）לדוד をどう訳すかについては諸説ある。このフレーズは、詩編中に73回登場し、第一巻（詩3-41編）に最も集中して現れている。これをダビデの作による歌と解することもできようが（Saleska, 118）、ダビデに捧げる歌、あるいはダビデに因んだ歌という意味として理解することもできる（Craigie/Tate, 33-35）。その場合、ダビデは必ずしも歌の作者として引き合いに出されているわけではなくなる。

2b）聖書協会共同訳は、צרי を「私の苦しみ」と抽象的に訳す。しかし多くの注解者・聖書翻訳においてこの語は、「苦しめる者たち」あるいは「敵たち」と、詩人に敵対する具体的な人物を指す語として理解している（Hartenstein/Janowski [Lieferung2], 135; Craigie/Tate, 70; ESV; EÜ）。この詩の内容から考えて、後者の考えがより相応しいと考えられる。

3c）נפשׁ を「魂」と訳したが、これは単に内面的な自己のことを指し示すのではなく、身体的な側面をも含む表現である。従って、意味としては詩人の存在そのもの、あるいは命ということである（月本 [I], 40; Hartenstein/Janowski [Lieferung 2], 136）。

3d）Pesh. では「お前に（*lky*）お前の神（*b'lhky*）の救いなどあるものか」と

されている。敵が詩人に対して直接語りかけている有様が強調されていると考えられる。

3e）「セラ」（סלה）という言葉は、詩編中に71回登場する。その多くは、詩編の第一巻から第三巻（詩3-89編）に集中している。何らかの音楽的指示を示す言葉であると考えられるが、詳細は分からない。パレスティナ・ユダヤ教の伝統においてこの語は、祝福あるいはコーラスを指示するものとして理解されていたらしい。しかし、多くの学者は、この語は小休止を指示するものであると見ている。その根拠は、סלה が動詞√סלל「上げる」からきていると理解した場合、סלה は演奏者が一旦演奏をやめて「目を上げる」ことを意味すると理解可能だからである。実際、LXXにおいてこの語はδιάψαλμα と訳されており、これは恐らく「小休止」を意味する。しかしその一方で、この語が√סלל「上げる」からきているとすれば、その意味から転じて、「演奏を新たに開始する」とか「演奏の音量あるいはピッチを上げる」といった意味に理解することも可能であろう（以上、Saleska, 120）。このように、この語が何らかの音楽的指示であることは間違いないが、その厳密な意味を特定することは困難である。

4f）LXXではἀντιλήμπτωρ μου「私の守護者」と訳される。

5g）MTではקולי「私の声」が文頭に置かれている。これは目的語としての機能を果たしているというよりはむしろאקרא「私は呼ばわる」という動詞の「第二の主語」として機能していると考えられる（*GKC*, §144m）。またאקרא という語は、ここにおいては過去において繰り返された行為のことを意味していると考えられる（Hartenstein/Janowski [Lieferung 2], 136）。

5h）MTではויענני（*wayya'ănēnî*）と記され、継続*waw*の形が用いられている。このように、未完了形を完了形として用いるやり方は、詩編の古さを示す要素であるとも言われる（Hossfeld/Zenger 1993: 56）。しかし、BHSのアパラタスにおいては、これを従属*waw*（あるいは接続*waw*）に読み替えるようにとの提案が記される（*weya'ănēnî*）。このように変更すると、現状のMTが、神が詩人の訴えに対して既に応えてくださったという意味であるのに対

して、詩人が神に訴えれば、そのことによって神が応えてくださるに違いないという願望の意味になる。あるいは、単純に接続*waw*と理解しても、概ね同じ意味になる。こうした提案に従う注解者も存在する（例えばCraigie/Tate, 70-71）。しかし、私見では、MTの読みをそのまま保持する方が理に適っている。実際、LXXにおいては、5節の動詞は全てアオリスト形で記されている（φωνῇ μου πρὸς κύριον ἐκέκραξα, καὶ ἐπήκουσέν μου ἐξ ὄρους ἁγίου αὐτοῦ）。

6i）**ואישׁנה**（*wāʾîšānâ*）は、5節と同じく継続*waw*である。一見すると希求法（cohortative）のように見えるが、継続*waw*で未完了一人称単数・複数が用いられる際に、このような形になることがあるとされる（*GKC*, §49e）。こうした形式は、比較的後代の書物に現れると言われているが（Ibid.）、そうすると、詩文における継続*waw*の用法がその詩文の古さを示しているという5節で紹介した見解とは矛盾することになる。もしかすると、この詩編での継続*waw*の用法は擬古的なものなのかもしれない。

7）MTの**מרבבות**（√**רבבה**）という語は、物や人が夥しいことを示す名詞に前置詞の**מן**が付いた形であるが、Tg.においてこの語は**ממצותא**（√**מצות**）と訳されており、これは「争い」を意味する。恐らくTg.の訳者は、MTのヒブル語を「争い」を意味する**מריבה**の複数形**מריבות**と理解したのかもしれない。

8k）MTでは**לחי**「顎」となっているが、LXXではματαίως「理由なく」（for nothing, without ground）と訳されている（従ってLXXでは「あなたは、理由もなく私に敵対する者たちを打ち砕いたのですから」となる）。

＜構造＞

本詩編は、全体をアブサロムによるダビデに対する謀反の物語として枠づける導入（1節）を除くと、次のような集中構造を示していると考えられる（以下、Hartenstein/Janowski [Lieferung 2], 137-140の解説に従う）。

2-4節	祈り1	A
5-7節	祈りが聞かれたことについての報告	B
8-9節	祈り2	A´

この構造においては、各セクションがbicolonを三つずつ保持する形（つまり各セクションが三つのstropheを保持する形）から成っている点が特徴的である。そして、各セクションの最後のbicolonにおいては、いずれも神に対する信頼の告白が置かれている点も特徴的である（4節、7節、9a節）。

語彙上の対応関係に目を向けると、上記集中構造に対応して、幾つかの注目すべき特徴が浮かび上がる。まず、Aのセクション冒頭で「主よ」（יהוה）という呼びかけが二回あり（2節、4節）、それに呼応するように、締めくくりのA´のセクションにおいては「立ち上がってください、主よ」（קומה יהוה）という呼びかけ（8節）、そして「主にこそ救いはある」（ליהוה הישועה）という告白の言葉（9節）を通して、主の名がやはり二度登場する。このように、集中構造の外枠であるA// A´において、それぞれ主の名が二度用いられるという明確な構造が見て取れる。

また、この観点からもう一点指摘することができる。それは「救い」に関する語彙の対応である。セクションAにおいて（3節）、詩人の敵対者たちの言葉として、詩人に「救いはない」（אין ישועתה）と言われていることに対応して、セクションA´においては、「私を救ってください」（הושיעני）という嘆願、そして「主にこそ救いはある」（ליהוה הישועה）という告白が語られている。こうした形で、救いに関係する語彙が、構造上の枠組みに当たる部分において明確に対応しているのである。

最後に、以上の集中構造においては、時間の要素もまた、この集中構造に対応していることが示される。セクションAにおいて詩人は現在の苦しみについて告白している。しかしその後、詩人はセクションBにおいて、自らの過去を思い起こし、以前自分が神を呼んだ時に、神が応えてくださったことに思いを向けている。その上で、最後のセクションA´においては再び時間が現在に

戻り、詩人は確信の言葉と共に、主が敵を滅ぼしてくださることを願い祈るのである。このように、本詩編の集中構造においては、それと対応する形で、A（現在）→B（過去）→A´（現在）という構造が浮かび上がってくる。つまり、現在の時間軸を枠組みとしつつ、その中心には過去の救いの体験が位置付けられているのである。

（次回は＜類型と生の座＞の項目の記述から始めることとする）

（たなか・ひかる）